

月と人間

三年 大北 隼矢

ぼくは今、月に住んでいる。そして、

ワーキングホリデー制度を使った滞在だ。

ここは完全に定住するための場所ではない。

地球からの留学生や研究者、そして、大富豪

のための施設が整った場所である。

科学技術は大きく進歩した。しかし、すべて

この人間に平等に与えられているわけではない。

むしろ、貧富の差は地球以上に広がって

いるのが現実である。

地球が見える側の月面は、誰もが憧れるリ

ゾート地になった。別荘が建ち並び、夜にな

れば音く光る地球を眺めながら、パーティー

が開かれる。まるで昔のハワイのようだ。

一方で、地球が見えない裏側は研究施設や

水脈が広がり、安い労働力で人々が働かされ

ている。

ぼくはよく考える。月に来る価値とは。そ

もそも人間が月に来る必要はあるのか。空気

も水も人工的に作られて、重力は地球の大部分のーしがない。それでもここにしかない魅力がきつとあるに違いない。

残念ながら、人間が集まるところに、いじめは生まれる。宇宙にはなかった現象だ。

ただ、この世界には一つの鉄則がある。加害者は、土星の月「タイタン」で労働しなくしてはならない。マイナス一八〇度、雲が分厚く土星も見えないなか、地球化のボランティア活動をあるのだ。

加害者は去り、被害者は徹底的に守られる。同じことは二度と繰り返されない。

最初は冷たいように思えたが、実際に安心感があつた。多くの友達も一度標的にされたが、この規則のおかげでのびのびと過ごせている。地球にはないものだ。

月には「重力体験施設」があり、地球では不可能なジャンプや競技を楽しむことができる。

実際、月の半分は巨大なスポーツ施設として

て使われ、観光客やスポーツ選手でにぎあ
 っている。ぼくも時々、友達と一緒に低重力サッ
 カーを楽しむ。地球よりボールが高く跳ね、空
 中の動きが長く続くのだ。まるで自分がスー
 パースターになったような感覚がある。
 実は、大事な家族のプールのあこも月に
 連れてきている。あこは地球で育ったが、重
 力が軽いせい、月ではやたらと飛び跳ねる
 その姿が、可愛くて仕方がない。
 あこはただの犬ではない。ときに名探偵の
 ように鋭い嗅覚で事件を解決するのだ。
 ある日、リゾート地エリアで事件が起きた。
 富豪の別荘から「おにぎり」が忽然と消えた。
 夫人たちは混乱していたが、ぼくは「名探偵
 だつたらどう考える？」と頭を働かせた。
 現場をよく観察すると、床に小さな足跡の
 ようなものが残っている。人間のものではな
 い。あこが匂いを嗅ぎ取って走り出した。
 あこが追いかけた先は、観光客の集まる低重

カジャンポエリヲだった。
 ぼくは敬慕いた。犯人は人間ではなく、実験
 用に持ち込まれた小型のロボット猫だっ
 た。プログラムの誤作動によつておにを
 「おもちゃ」と勘違いし、持ち去ったのであ
 る。あこは吠え、ぼくはロボット猫を捕まえ、
 無事におにざりは戻った。
 事件は解決。大人たちは一斉に拍手をした。
 「よっ、名探偵！」と誉められて、あこは嬉
 しそうにしつぽをふりふりした。
 その夜、別荘のテラスであこと一緒に地球
 を眺めた。青く輝く地球を見ていると、一人
 間はなぜここまで来てしまったのかと改め
 て考える。月は住む場所としてまだ完全では
 ない。けれど、科学の力と人間の欲望が、こ
 こに一つの世界を作り上げている。
 ぼくは未来に生きていく。いじめもあれば、
 格差もある。けれど、大切なあこと一緒に
 どんな謎や困難も乗り越えていける気がして
 いる。

月は、まるで人間の矛盾と可能性を映し出

す鏡のようだ。

月の暮らしはまだ始まったばかり。こゝか

らも好奇心を胸に、さまざまなことに取り組んで

いきたい。